

受け手と送り手に着目したテキストメッセージの伝達情報に関する研究

石川 真*

(平成22年9月30日受付；平成22年10月25日受理)

要 旨

本研究は、CMC (Computer Mediated Communication) におけるテキストメッセージにおいて、その伝達情報に対する送り手と受け手の認知の特徴を明らかにすることを目的とした。とりわけ、携帯電話を利用したメールにおける絵文字をはじめとする多様な表現に着目し、2つの調査研究を通して検証した。

研究1では、絵文字を中心としたテキストメッセージを利用したコミュニケーション時の伝達情報に対する理解にどのような差異がみられるか、その特徴を探ることとした。その結果、面白さ・遊びとしての絵文字において、女性は送り手としてメッセージ内容に対する伝達精度よりも受け手としてのメッセージ理解が高いのに対し、男性においては逆の傾向が示された。

研究2では、快、不快という感情表現に着目し、伝達情報の理解や精度がどのような文字によるものか、その特徴を探った。さらに、テキストメッセージによる感情表現の理解が社会的スキルや性別により、どのような傾向がみられるかを検証した。その結果、伝達情報の理解や精度において判断の重要な拠り所となる文字は絵文字であることが示された。一方、感情表現の理解については、快表現においては差が見られなかったものの、不快表現において受け手の理解力の方が送り手の伝達精度よりも高い傾向であることが示された。

KEY WORDS

テキストメッセージ text message

絵文字 pictograph

社会的スキル social skill

性差 gender differences

1. はじめに

情報技術の発展に伴い、多様なネットワークコミュニケーション手段の選択が可能となっている。平成18年版情報通信白書によれば、パソコンではWeb閲覧の次に電子メールの利用頻度が多く、携帯電話においては電子メールの利用頻度が圧倒的に高い現状が報告されている。電子メールは、テキスト(文字)でメッセージの交換を行うCMC (Computer Mediated Communication) の代表格であり、コミュニケーション手段の気軽さ、利便性などが特徴の一つと言える。また、対面において相手に伝わる非言語的な情報が、CMCにおいては欠落する情報濾過機能(Cues Filtered Out)も大きな特徴の一つとして挙げられる。情報濾過機能は、チャットや匿名掲示板でのフレーミングや誹謗中傷の書き込みが後を絶たない大きな原因の一つとして考えられている一方で、自己開示がしやすい、対等な立場で意見を述べやすくなるなど、プラスに働いていることも明らかとされている。

情報通信技術が急速に進歩している反面、情報社会にはCMCにまつわるさまざまな問題が山積している。これらの問題については、たとえば、情報通信技術により対面に限りなく近いコミュニケーション環境を構築して解決の道を探る方法が挙げられる。また、新たな法整備や秩序を生み出すことによって解決の糸口を探る場合もある。たとえば、「特定電気通信役務提供者の損害賠償責任の制限及び発信者情報の開示に関する法律」は2002年5月に施行された。一方、教育現場では、ネチケットやモラルの指導を通して、一人一人の情報社会への参画意識や態度を高める取り組みが行われている。たとえば、若月・石川(2006)は学習プログラムを開発し、情報社会に必要なネットワークコミュニケーション能力の育成に取り組んでいる。

このように、CMCにまつわる諸問題に対する解決アプローチは多様であるが、依然としてCMCについてより多くの側面から特徴を明らかにしていくことが求められている状況にあると考えられる。たとえば、CMCはどの程度非言語的な情報を伝達しているのかという観点からの検証は必ずしも十分に行われているわけではない。また、メッ

*学校教育学系

セージの受け手は濾過された情報をどのような手続きを通して知ろうと努めているか、逆に、濾過されてしまう情報をいかにメッセージに込めて送ろうとしているかという送り手のコミュニケーション行動の特徴については十分に明らかにされていない。このような点を少しでも明らかにしていくことで、より効果的な問題解決の提案がなされると考えられる。

ところで、Norman (2004) は、携帯電話でやり取りされるメッセージは短く、ショートテキストメッセージと呼んでいるが、そのやりとりは情動的なコミュニケーションであると述べている。しかし、テキスト（文字）だけの情動、感情等を含む情報のやり取りにおいて、コミュニケーションが成立するためのメカニズムや、そのやり取り時にどのような固有の問題が生じているのかについては明らかにされていない。これまでのCMCに関する研究の多くは、対面と比べてCMCは伝達される情報が欠落しているという観点からのアプローチが中心であったといえる。しかし、Norman (2004) の述べるショートテキストメッセージが情動的なコミュニケーションとして積極的に活用されていることを踏まえれば、CMCでも対面に引けを取らないダイナミックなメッセージのやり取りをしていると捉えることができる。そこで本研究では、「送り手」と「受け手」という立場の違いに着目し、CMCにおける伝達情報の理解に関わる特徴を明らかとすることを目的とした。

2. 研究1

2. 1 目的

テキストメッセージを用いた電子メール（以下、メールと記す）は、日常的なコミュニケーション手段の一つといえるが、近年では携帯電話を利用するケースが増加している。また、利用目的や相手によって携帯電話とパソコンのメールを使い分けるユーザも多い（総務省、2007）。小林ら（2007）が2005年に実施した調査によると、携帯電話でのメール利用率が95.5%であったことが報告されている。つまり、携帯電話でのメールはもはや日常的なコミュニケーション形態といえる。すでに我々の日常生活に不可欠な存在となったメールをより快適なコミュニケーション手段とするためには、メールを介して伝達される情報の特徴について多面的に検証する必要がある。たとえば、石川・平田（2008）はメールを扱う立場（受け手、送り手）や相手との親しさの度合いによって、相手の社会的存在感という認知の程度に違いがあることを明らかとした。

そこで、本研究では近年の利用状況を踏まえ、携帯電話によるメール利用を対象とする。そして、絵文字を中心としたテキストメッセージを利用したコミュニケーション時の「送り手」および「受け手」という立場の違いによって、メッセージの伝達情報に対する認知にどのような差異がみられるか、理解という観点からその特徴を探ることとした。特に、携帯メールで使用する「文字の種類（絵文字／通常文字）」や、送り手と受け手の「相互の属性」の違いなどに着目して検証する。

2. 2 方法

2. 2. 1 対象者・実施時期

情報教育に関わる講義科目を受講する学部1年生158名（男70名、女88名）を対象とし、携帯電話の利用状況と携帯電話でのメール利用に関する調査を授業時間内に実施した。なお、質問紙のデータの取り扱いについては個人情報の漏洩のないように対応する旨を告知し、フェイスシートには学籍番号と性別のみを記入させた。

2. 2. 2 質問紙（調査項目）

日頃携帯電話でメールのやり取りのある任意の相手を「友人」、「目上の人」、「家族」の中から最大2名抽出させ、それぞれの親密さの度合いを「非常に親しい」から「全く親しくない」の5件法で評定させた。メールのメッセージ内容に関する質問項目において、メールで使用する文字タイプ4種類（a.情報を表す絵文字、b.面白さ・遊びとしての絵文字、c.感情を表現する絵文字、d.通常文字）のそれぞれに対して、以下の3つのケースで5件法により回答させた。

- ・各文字を使ってメッセージを送るとき、あなたはどのくらい相手に正確に伝わっていると思いますか（以下、「1.送り手としての伝達力の精度」と呼ぶ）。
- ・各文字を使ったメッセージを受け取ったとき、あなたはどのくらい相手の伝えたいことを理解していると思いますか（以下、「2.受け手としての伝達情報に対する理解の精度」と呼ぶ）。
- ・各文字をどのくらい使用していますか（以下、「3.利用頻度」と呼ぶ）。

2. 3 結果および考察

利用者の性別要因（男，女），メールの相手要因（友人，目上の人，家族），親密度の要因（非常に親しい，かなり親しい，どちらでもない）について，伝達要因（送り手としての伝達力の精度，受け手としての伝達情報に対する理解の精度）との2要因分散分析を文字タイプ別に行った。なお，親密度の要因においては，「あまり親しくない」，「全く親しくない」の回答が皆無であったため，除外した。また，4種類の文字利用で利用されていない回答者のデータについても除外した。

性別要因と伝達要因による2要因分散分析の結果，文字タイプa（情報を表す絵文字）において交互作用が有意傾向（ $F(1,247)=3.28, p<.10$ ）であり，多重比較したところ，男性が女性よりも相手に伝わっていると思っれていることが示された（ $p<.10$ ）（図1（a））。さらに，文字タイプb（面白さ・遊びとしての絵文字）においては交互作用が有意（ $F(1,248)=7.01, p<.01$ ）であった。多重比較の結果，女性は送り手として相手への伝達の精度よりも，受け手として伝達情報理解の精度がより高いと思っれていることが示された（ $p<.10$ ）。それに対し，男性は逆の傾向が示された（ $p<.10$ ）（図1（b））。

メールの相手要因と伝達要因による2要因分散分析を行ったところ，いずれの文字タイプにおいても，主効果，交互作用とも有意ではなかった（ $p>.10$ ）。石川・平田（2008）では，今回と同様のメールの相手（友人，目上の人，家族）における相手の存在感について比較し違いを明らかとした。この点を踏まえ，今回は差が見られなかった受け手，送り手における理解という側面においては，さらなる要因の検討をし，その傾向を探る必要があると考えられる。

親密度要因と伝達要因による2要因分散分析を行ったところ，文字タイプb（面白さ・遊びとしての絵文字）で親密度要因の主効果が有意傾向（ $F(2,247)=2.42, p<.10$ ）であることが示され，多重比較したところ，「非常に親しい」相手の方が「どちらでもない」相手より，肯定的な結果が示された（ $p<.05$ ）（図2（a））。ここでの肯定的な結果は，受け手では伝達情報の理解の精度が高いこと，送り手では伝達した情報の精度が高いことを意味している。つまり，伝達情報においては，親密度の高い方が肯定的に認知される傾向が示された。一方，文字タイプd（通常の文字）においては交互作用が有意傾向（ $F(2,246)=2.44, p<.10$ ）であり，親密度がどちらでもない相手において，送り手としての伝達力の精度よりも，受け手としての伝達情報理解の精度の方が肯定的な評価をしている（ $p<.10$ ）ことが示された（図2（b））。

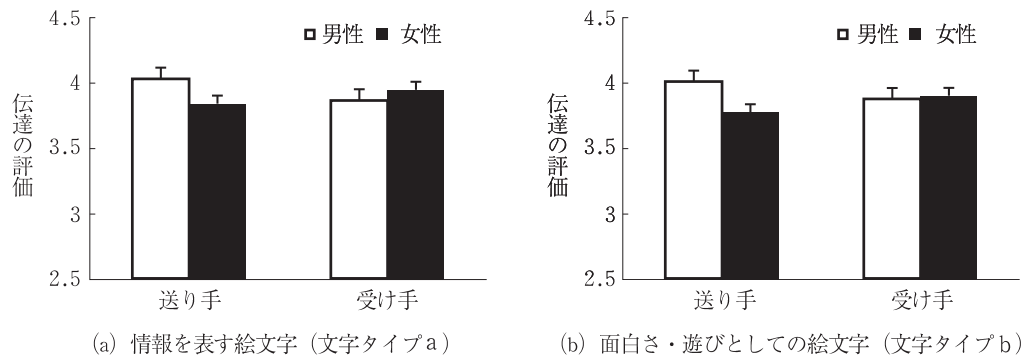


図1 性別による送り手および受け手の伝達情報に関する特徴

5段階評定で高い方が肯定的評価，エラーバーは標準誤差を示す。

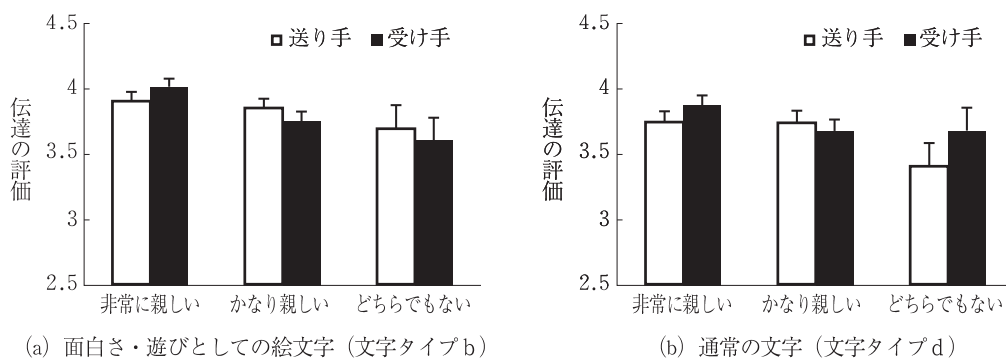


図2 親密度別による送り手および受け手の伝達情報に関する特徴

5段階評定で高い方が肯定的評価，エラーバーは標準誤差を示す。

絵文字を含むテキストメッセージによるコミュニケーションにおいて、「送り手」「受け手」の立場でメッセージ内容の認知に一部ズレが認められた。性差での特徴は、面白さ・遊びとしての絵文字において女性はメッセージ内容を送り手として相手に正確に伝わっているかという点に対しては若干謙虚な傾向を示しているが、受け手として相手のメッセージ内容を理解していると思っている傾向が高い。一方、男性は正反対の傾向で、受け手としてのメッセージ理解よりも、送ったメッセージが相手により正確に伝わっていると思っている傾向が示された。親密度の違いによる特徴において、面白さ・遊びとしての絵文字は、親しい相手の方が送り手、受け手ともに肯定的な傾向を示した。「面白さ・遊びとしての絵文字」は、他の3種類の文字と比べると、「遊び」要素が強いことから、具体的な内容を伝えようとする積極的な情報伝達は難しい可能性がある。そのため、「遊び」要素に対して、共有しやすい親しい相手においてより肯定的な評価の傾向が示されたのではないかと考えられる。なお、性差が示された点については、この「遊び」要素の捉え方が男女によって異なるのではないかと考えられる。一方、通常の文字では、どちらでもない相手のみ差が認められたが、親密度の程度により相手のメッセージに対する理解モデルが異なるのではないかと考えられる。

3. 研究2

3. 1 目的

研究1では、テキストメッセージの内容を限定せずに、絵文字を中心とした文字の種類別で伝達情報の理解に関わる特徴を探った。メールをはじめとするCMCではフレーミングの問題が取り上げられるが、これは怒りという感情表現を伴うものである。フレーミングという問題を解決するためには、さまざまなアプローチが考えられるが、少なくともこの感情が文字によってどのように伝わるかという点について検証しておく必要があるだろう。表情研究において、感情を複数の認知次元で表現する試みがなされているが、快、不快は、多くの研究の中で最も重要な認知次元として取り上げられている（たとえばSchlosberg (1954), Osgood (1966)）。

そこで、本研究では研究1では特定しなかったメッセージ内容を感情表現とし、快-不快次元における感情的な表現がテキストメッセージを介してどのように理解されるかを明らかとすることを目的とする。とりわけ、社会的スキルの違いや性差に着目して検証する。

3. 2 方法

3. 2. 1 対象者・実施時期

情報教育に関わる講義科目の受講者である学部生165名（男77名、女88名/18~23歳）を対象とし、菊池（1988）の社会的スキル測定の問題紙（KiSS-18）による調査、および携帯電話でのメール利用に関する調査を授業時間内に実施した。なお、質問紙のデータの取り扱いについては個人情報の漏洩のないように対応する旨を告知し、フェイスシートには学籍番号、性別、年齢のみを記載させた。

3. 2. 2 質問紙（調査項目）

携帯電話でのメール利用に関する調査では、日頃やり取りのある任意の相手を1名抽出させ、受け手および送り手双方の立場から、快・不快表現のメッセージのやり取りの頻度や内容の理解について7件法で回答させた。さらに、快・不快表現については、受け手としてどの部分から快不快を感じ取ったか、送り手としてどのような形で伝えるかを回答させた。あらかじめ6種類の文字等（メッセージ内容、単語、擬態語・擬音語、絵文字、記号、その他）を用意しておき、関わりの高い順序を回答させた。また、該当しない文字等については未記入を認めた。

3. 3 結果および考察

3. 3. 1 社会的スキルの因子構造

社会的スキルの18項目については、合計点を求めたところ、平均値は58.51だった（SD=8.80）。また、信頼性係数（クロンバックの α 係数）は $\alpha = .85$ であり、菊池（2004）で紹介された複数の調査結果とほぼ同様の結果が示された。社会的スキルの違いに着目し分析するため、平均値以上の者をSS上位群、平均値未満の者をSS下位群とし、社会的スキル要因とした。

続いて、社会的スキルの中でも特にコミュニケーションに関わる側面においてどのような影響があるかを明確にするために、18項目による因子分析（最尤法、適合度指標（カイ二乗値）に基づき5因子を抽出、バリマックス回転）を行った。その結果、第5因子までの累積寄与率は47.7%だった（表1）。このうち、コミュニケーションに関わる

因子は第3因子のみであり、会話能力因子と命名した。そして、この因子をコミュニケーションスキルの違いによる分析条件として採用した。因子得点を基として、0以上をCS上位群、0未満をCS下位群とし、会話能力要因とした。

表1 社会的スキル (KiSS-18) の因子構造

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	.748	.274	.246	.064	-.109	.711
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	.666	.070	.009	.130	.037	.467
7. 怖さや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	.660	.192	.084	-.059	.166	.511
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	.576	.182	-.031	-.032	.183	.400
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	.442	.279	.057	.141	.208	.340
9. 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか	.336	.313	-.035	.287	.255	.359
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	.378	.084	.107	.164	.014	.188
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	.208	.666	.133	.174	.061	.539
3. 他人を助けることを、上手にできますか	.269	.651	.022	.180	.145	.550
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか	.223	.497	.192	-.033	.133	.352
1. 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか	.283	.338	.268	.247	-.170	.356
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか	.156	.331	.229	.053	.061	.193
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	.028	.211	.032	.194	.096	.093
5. 知らない人でも、すぐに会話が始められますか	.113	.058	.987	.067	-.009	.995
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.096	.221	.535	.223	.031	.395
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	-.069	.167	.217	.192	.165	.144
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか	.227	.173	.384	.873	-.064	.995
12. 仕事の上で、どこに問題があるのかすぐにみつけることができますか	.330	.269	.042	.022	.901	.995
寄与率	14.89%	10.54%	9.56%	6.52%	6.17%	

3. 3. 2 メッセージ理解および伝達精度と使用される文字の関係

受け手として相手のテキストメッセージを理解する上で、どのような文字を振り所とするか、送り手として相手に理解してもらうためにどのような文字を使用するかについてその特徴を分析することとした。「その他」の文字についての回答はきわめて少なかったため、今回の分析対象からは除外したものの、その他を含む6種類すべてに順位づけした回答もあったため、1位～6位をそれぞれ6, 5, 4, 3, 2, 1の数値に置き換え、順位づけされていないものについては0に置き換えて分析することとした。また、同順位の場合は共通のルールに従って、数値の置き換えをした。

受け手において快、不快表現を理解する上で振り所としやすい文字について、フリードマン検定により分析した結果いずれも有意であった (快 $\chi^2(4)=276.2$, $p<.001$ /不快 $\chi^2(4)=221.17$, $p<.001$)。多重比較したところ、すべての文字間で有意差が見られた ($p<.001$)。一方、送り手としてどのような文字が理解されやすいと判断されているかについて、フリードマン検定により分析した。その結果、いずれも有意であり (快 $\chi^2(4)=254.60$, $p<.001$ /不快 $\chi^2(4)=211.04$, $p<.001$)、多重比較したところ、これらについてもすべての文字間で有意差が見られた ($p<.001$)。

表2は、それぞれの順位和であり、数値が高いほど順位が高いことを意味する。受け手は順位が高いほどその文字を振り所として表現を理解しようとしていることを意味し、送り手は順位が高いほど理解されやすい文字と判断していることを意味する。この結果より、いずれの場合においても、メッセージ内容>絵文字>単語>記号>擬態語・擬音語の順となっている。今回の選択肢には、文字以外の「メッセージ内容」の項目があり、この部分については検討する必要があるが、メッセージ内容というある種文章全体で判断することにより相手の伝えたいことを理解しようとし、相手に伝えようとしている傾向はメッセージの一部であるその他の文字に比べて高いのは特筆すべき特徴とは言えない。むしろ、絵文字が理解の振り所としている傾向が高いという点に着目すべきと考えられる。通常、絵文字はそれ自体で何らかの意味を持ち、それはある種の単語が置き換えられたものとも推察される。それにもかかわらず、いずれの場合においても、単語より絵文字の方が高い傾向を示した点は特徴と言えるだろう。

表2 メッセージ理解に関わる文字の優先度

		メッセージ内容	単語	擬態語・擬音語	絵文字	記号
受け手	快表現	786	495	267	742	339
	不快表現	740	471	255	645	313
送り手	快表現	777	491	304	718	317
	不快表現	697	479	255	670	303

3. 3. 3 快・不快表現に対する理解について

快表現および不快表現に対してどの程度理解しているかについて、社会的スキルおよび性差に着目して分析した。社会的スキルについては、社会的スキル要因（SS上位群、SS下位群）と会話能力要因（CS上位群、CS下位群）、性差については性別要因（男、女）とし、これらの要因と送受信要因（受け手、送り手）を組み合わせで分析した。

はじめに、快表現についてどのような理解をしているかについて分析した。性別要因と送受信要因の2要因分散分析を行った。その結果（図3(a)）、性別要因の主効果が有意であり（ $F(1,158)=13.14, p<.01$ ）、女性の方が、男性よりも有意に理解している傾向が示された。社会的スキル要因と送受信要因による2要因分散分析を行った結果においては（図3(b)）、社会的スキルの主効果が有意傾向であり（ $F(1,156)=2.77, p<.10$ ）、社会的スキルの低い方が高い方よりも理解していると評定する傾向が示された。会話能力要因と送受信要因の2要因分散分析では、主効果、交互作用とも有意ではなかった（ $p>.10$ ）。

今回の結果においては、社会的スキルの低い者の方が受け手におけるメッセージの理解力と送り手としての伝達精度の評定が高い傾向を示した。一方、会話能力の要因において有意差がなかったことから、快表現についての理解は会話能力を含む社会的スキルというトータルの能力の影響が強い傾向があると考えられる。一般的に、社会的スキルの高い者は対人関係やコミュニケーションに関わる能力が高い。しかし本研究では、むしろ相反する傾向の結果が得られた。このような特徴が示された要因については、今後更なる検証が必要であると考えられる。

送受信要因の主効果あるいは、交互作用がいずれも有意ではなかった（ $p>.10$ ）。したがって、受け手と送り手における快表現に対する理解の程度に対する認知にズレがないと解釈することができる。

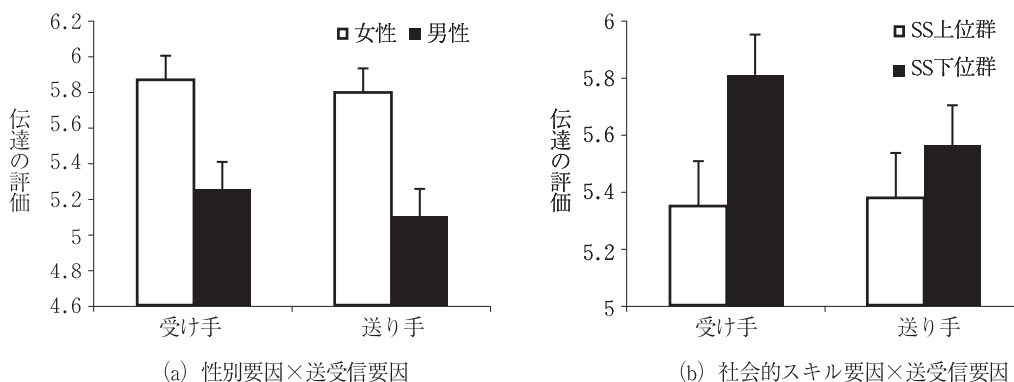


図3 快表現に対する理解の傾向

7段階評定で高い方が肯定的評価、エラーバーは標準誤差を示す。

つづいて、不快表現についてどのような理解をしているかについて分析した。性別要因と送受信要因の2要因分散分析を行った結果(図4(a)),双方の主効果が有意であった(性別要因($F(1,156)=5.11, p<.05$)/送受信要因($F(1,156)=10.39, p<.01$))。女性の方が男性よりも有意に理解している傾向を示した。また、受け手の方が送り手よりも理解の程度において高い傾向が示された。社会的スキル要因と送受信要因では、交互作用が有意であった($F(1,154)=4.27, p<.05$)。多重比較の結果,SS下位群において送受信の差があり,受け手の方が送り手よりも理解の程度が高い傾向が示された($p<.01$) (図4(b))。会話能力要因と送受信要因による2要因分散分析では,送受信要因のみが有意であり($F(1,154)=9.54, p<.05$),受け手の方が送り手よりも有意に理解の程度において高い傾向が示された(図4(c))。

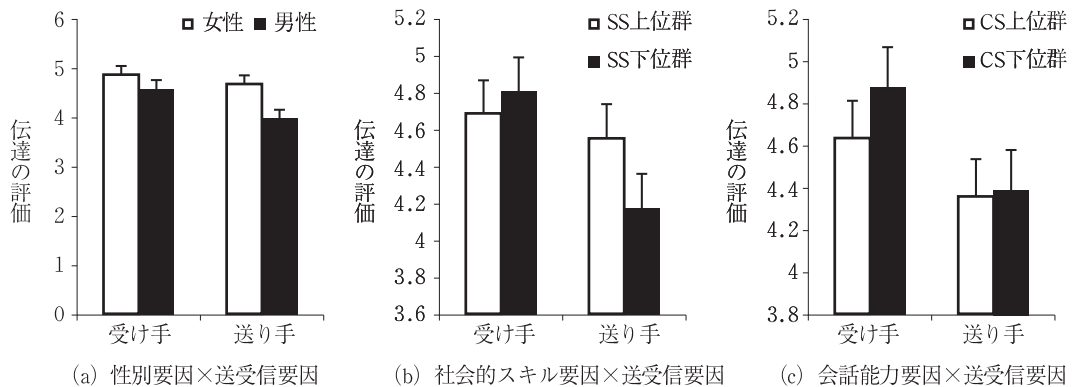


図4 不快表現に対する理解の傾向

5段階評定で高い方が肯定的評価,エラーバーは標準誤差を示す。

不快表現の結果では,すべての組み合わせにおいて,送受信要因に有意差が見られた点の特徴といえる。そして,すべてにおいて,受け手の方が送り手よりも理解の程度が高い傾向を示した。これは,受け手としてメッセージを理解している程度が,送り手として相手に理解されていると思う程度(伝達の精度)よりも高いことを意味しており,不快表現には見られなかった傾向である。すなわち,伝達するメッセージが快,不快という感情表現の違いによって,受け手の立場と送り手の立場の理解の認知にズレがあるという傾向が明らかとなった。この原因については今回の結果のみでは,十分な検証を行うことはできないが,不快表現における送り手の伝達精度が高くないことから,本来は控えたい表現であるものの,やむを得ず伝達するメッセージであり,「誤解されるのでは」という不安を抱えている可能性がある。それに対し,快表現というポジティブなメッセージは誤解の生じる可能性が低いいため,送り手の立場でも受け手の立場でも理解,解釈に差がないという可能性があると考えられる。

4. おわりに

本研究では,テキストのみによるコミュニケーションにおいて,情動や感情等を含む情報の伝達に関わる認知に着目した。そして,「送り手」と「受け手」という立場の違いに着目し,CMCにおける伝達情報の理解についての特徴を2つの調査研究により明らかとすることを目的とした。ここでは,研究1と研究2の「受け手」「送り手」という共通の側面から得られた結果に基づき検証する。

研究1は,やり取りのメッセージ内容は限定しないものの,特定の文字による受け手の理解度と,送り手の伝達精度の特徴を探った。一方,研究2においては,やり取りのメッセージ内容として快,不快という感情表現における受け手,送り手の理解と文字の伝達力についての特徴を探った。

メッセージに用いるテキストは,研究1が絵文字中心であったのに対し,研究2はメッセージ内容まで含むより幅広い文字を対象とした。ただし研究2より,メッセージ内容を除けば,絵文字が快,不快表現を理解するための拠り所となる重要な文字であることが示された。この点を踏まえれば,研究1で絵文字中心での結果についても,十分に有用な知見になりうると考えられる。とりわけ,いくつかのタイプの絵文字については「受け手」「送り手」の立場の違いにより,文字が情報を伝達しうる力が異なる傾向を示した。一つは性差であり,もう一つは親密度による違いからの検証により,全体的な傾向ではなかったものの,「受け手」「送り手」という立場の違いによって,テキストメッセージの理解に対するズレがあることを示すことができたと考えられる。このように,メールで用いられるさま

さまざまな種類の文字には、伝達に関わる特徴や傾向に違いがあることを明らかにしていくことで、より円滑なコミュニケーションを実現することが可能になると考えられる。

一方、研究2の快、不快表現における理解に対する「受け手」「送り手」のズレは、快表現においては異なる傾向が示されなかったのに対し、不快表現においてはその傾向が示された。今回の結果は、受け手の方が送り手よりも理解している程度が高いという特徴が示されたが、理解のズレは、ある種の誤解が生じる可能性を高めることにも関連すると考えられる。その意味においては、フレーミングなどの原因究明や、その対策を検討する上で重要な知見になりうると考えられる。また、今回は、感情の中でも快、不快という表現に限定したが、これが快、不快表現特有の傾向であるのか、それともその他の感情表現や感情を伴わない表現内容によって大きく特徴が変わるのかについては、今後の検討課題である。

参考文献

- 石川 真・平田乃美 (2008) 携帯電話を利用したテキストメッセージによるコミュニケーションに関する研究. 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 624-625.
- 菊池章夫 (1988) 『思いやりを科学する』川島書店.
- 菊池章夫 (2004) 『KiSS-18研究ノート』. 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6(2), 41-51.
- 小林哲生・天野成昭・正高信男 (2007) 『モバイル社会の現状と行方』NTT出版.
- Norman, D. A. (2004) Emotional Design: Why we love (or hate) everyday things. Basic Books. [岡本明・安村通晃・伊賀聡一郎・上野晶子 (訳) (2004) エモーショナル・デザイン. 新曜社.]
- Osgood, C. E. (1966) Dimensionality of the semantic space for communication via facial expressions. *Scandinavian Journal of Psychology*, 7, 1-30.
- Schlosberg, H. (1954) Three dimensions of emotion. *Psychological Review*, 61, 81-88.
- 総務省 (2006) 『情報通信白書平成18年版』ぎょうせい.
- 総務省 (2007) 『情報通信白書平成19年版』ぎょうせい.
- 総務省 (2008) 『情報通信白書平成19年版』ぎょうせい.
- 若月隆雄・石川 真 (2006) ネットワークコミュニケーション能力育成学習プログラムの開発. 日本教育工学会第22回全国大会講演論文集, 849-850.

付 記

本研究は、平成19-21年度科学研究費補助金(若手研究(B))「テキストコミュニケーションを円滑にする感性情報に関する基礎的研究(課題番号19700237)」の助成を受けて行ったものである。

A study of transmission information in the text message communication focused on senders and receivers

Makoto ISHIKAWA*

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the cognitive feature about the sender and receiver of the transmission information in the text message communication. Especially, it was paid attention to various expressions including the pictograph in using the cellular phone, and two research studies were conducted.

In research 1, the cognitive feature of transmission information in the text message of various characters including pictograph was investigated. As a result, gender differences were shown in understanding pictogram tended to attraction. Female tended to understand transmission information of message better as the receiver than as the sender, but male got an opposite tendency.

In research 2, expression based on pleasure-displeasure dimensions was evaluated and the tendency in understanding of transmission information under the expression was discussed. As a result, receivers did not differ from senders in understanding expressed pleasure, whereas it was shown that receivers better understood expressed displeasure than senders.

* School Education